

# Gift of Life

## Vol.4

### 兵庫腎疾患対策協会会報

発行：兵庫腎疾患対策協会  
 住所：〒659 芦屋市船戸4-1  
 ラポルテ4F (安井眼科内)  
 TEL：0797-31-8288  
 FAX：0797-22-6144

## 活動報告

### 1995年度(1995年4月1日～1996年3月31日)

- ①兵庫腎移植コーディネーターの養成に対して助成 2名 (6月)
- ②高等学校および看護学校教育における臓器移植についての普及啓発に対して助成 (6月)
- ③会報「Gift of Life」Vol.3 発行 (9月)
- ④第5回総会及び講演会開催 於：ホテル 竹園 (10月14日)  
 講師 松村満美子 (ジャーナリスト、評論家)  
 「腎不全医療は今」  
 後藤武男 (高砂市民病院院長、兵庫県透析医学会長)  
 「糖尿病性腎症について」
- ⑤神戸新聞に啓蒙広告「腎移植に理解と協力を」を掲載 (10月)

### 1996年度(計画) (1996年4月1日～1997年3月31日)

- ①第6回総会及び講演会開催 於：ホテル 竹園 (6月8日)  
 講師 前川正信 (日本腎臓移植ネットワーク近畿ブロックセンター長)  
 「(社)日本腎臓移植ネットワークの役割と実績」
- ②会報「Gift of Life」Vol.4 発行 (6月)
- ③収益事業「芦屋サマーカーニバル」に参加 (8月)
- ④神戸新聞に啓蒙広告を掲載 (10月)
- ⑤移植コーディネーターの養成に対して助成
- ⑥腎移植推進月間の全国強化キャンペーン協力 (10月)

### 1995年度研究助成の報告

① 高等学校教育、看護学校教育における臓器移植の啓発協会の助成を得て作成したスライドを使用し、高等学校6校約500名、兵庫県高等学校社会科の教師の集まり、早稲田大学同窓会、多くの看護学校等で啓発活動を実施。その統計と効果は、日本医事新報 (No.28平成7年10月7日) に発表。また、神戸新聞、読売新聞、共同通信社より各地方紙に配信され、その後も、講演等、依頼が続いている。

② 移植コーディネーター2名の研修助成の報告  
 助成をいただいた芦刈淳太郎氏は、平成7年度(社)日本腎臓移植ネットワークの研修を受け、本年4月1日より移植コーディネーターとして同ネットワークに正式採用となる。  
 曾我明美氏も芦刈氏と同様研修を受け、本年4月1日より兵庫医科大学に身分をおいたまま、同ネットワークの兵庫腎移植コーディネーターとして委嘱状をうけ活動の準備を進めている。  
 近畿ブロックセンター  
 チーフコーディネーター  
 菊池耕三

## ご挨拶

兵庫腎疾患対策協会  
 会長 石神襄次



あの忌まわしい大震災から既に1年半が経過し、神戸の町も漸く活気を取り戻しつつあります。しかし、未だに仮設住宅での不便な生活を余儀なくされ、しかもそこから透析施設に通われている人々を見るにつけ心が痛みます。本会も災害後の障壁を乗り越え、遅々とした歩みではありましたが、本来の目的に向かって活動を続ける事ができました。とくに、高等学校および看護学校やその他の各種団体における腎移植の普及、啓発、県コーディネーターの養成に対しての助成などを行い、又、総会講演、新聞広告によって腎の大切さを一般の方々にも理解して頂くべく努力をして

まいりました。この間、会員の皆様方から寄せられた暖かいお励ましに心から感謝の意を表します。とくにコーディネーターの方々には、本来の多忙な業務の間をさいて、教育、啓蒙に奉仕していただき厚く御礼申し上げます。お陰様にて、兵庫県では全国に先駆けて今年度より県独自のコーディネーターを採用され、又、県下の腎移植の会の方々も我々の運動に加わって自己の体験にもとづいた移植に啓蒙運動をして頂くことになりました。今後、県下の腎移植の推進に大きな戦力になるものと期待しています。昨年度から発足した全国腎移植ネットワークも実質的な活動を始めることとなります。腎疾患の予防は勿論の事、移植に際しても、諸外国とくに充腎に頼ることなく、日本人の腎移植は日本人によってとする我々の悲願の達成に今後も変わりなきご支援をお願いいたします。

## 兵庫腎移植の会について

兵庫腎移植の会  
 会長 中道弘一

今回「ギフトオブライフ」に紙面を割っていただく機会を与えられましたので、兵庫腎移植の会の活動について皆様のご理解を得たいと思います。  
 兵庫腎移植の会は元県立西宮病院の腎移植の患者会「ひまわり会」と兵庫医大の「そらまめ会」が5年前に合同して結成されたものであります。現在会員は約160名で、神戸大学付属病院、神戸市立中央病院等よりも参加を得ています。会員の生体腎・死体腎の比率は70：30位です。

県立西宮病院の初めての腎移植は昭和48年で、現在移植28年目の人は全く健常人と変わらず元気であります。一昨年移植後県西20周年・兵庫医大10周年の記念パーティーを開催して患者と家族・先生・看護婦さんと共に祝賀いたしました。

会の方針としては患者同志の親睦を図ることを主としていますが、腎移植の普及・推進も大きな目標であります。その為に何をすべきかと迷いながら腎移植のキャンペーン等にも積極的に参加するようにしています。また顧問の先生方を講師として勉強会を年一回行うようにしています。会報も年間3回発行しています。会報を発行するのは患者同志の連帯感を維持するのと各種情報の提供・自己管理の奨励を主な狙いとしています。

移植者はとかく移植に成功してしまうと表面に出がらない傾向にあります。透析の方々が移植して拒絶反応のためにまた透析に戻った例を身近にみられ、もう一つ移植に踏み切れない人が多いと聞くにつれ移植すればこんなに元気になり自由が満喫できるんですよとアピールする機会がもっとあっていいのではないかと絶えず思っております。

その様な思いのなかで昨年は兵庫県腎友会と我々兵庫腎移植の会とで透析者と移植者の交流親睦会を開催し好評でありました。今後も機会をとらえ行いたいと思います。

臓器移植法案が国会で審議が進まないなか、我々は人間の命の大切さを考え、移植のすばらしさ・必要性を改めてPRしていきたいと思ひます。

## お願い

協会の活動のため、ひきつづき温かいご支援をお願いいたします。

ご寄付・会費振込口座

- さくら銀行 芦屋駅前支店 ④ 3511181 兵庫腎疾患対策協会
- 郵便局 神戸01110-1-9421 兵庫腎疾患対策協会

### 1996～1997年度兵庫腎疾患対策協会幹事

会長	石神襄次	金津和郎	高田光義	義博	八馬富久子	森村美佐子
	荒川創一	守殿貞夫	田口永隆	子清	西野信	多津子
	生駒文彦	永野耕三	豊田清一	藤原嘉一	芳井芳一	吉永和
	井上聖士	後藤武男	中道弘一	久三	松本修	正和
	井原英有	坂井瑠実	長久	三三		国際ソブチニスト
会監	黒丸正四郎	西村多枝子				神戸東 (50音順)

# 糖尿病の合併症、 殊に腎症の予防について



兵庫県透析医学会長  
高砂市市民病院院長  
後 藤 武 男

腎不全状態に対して、血液透析療法及び、移植療法の普及により、多くの患者さんの日常生活への復帰が、より可能となり、又、延命効果についても非常に大きな成果を挙げている事は、皆様方もよく御存知の事と思います。

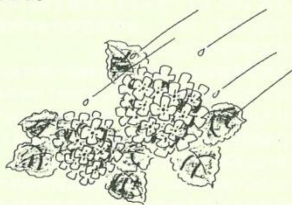
又、移植については、先年、腎移植ネットワークが始動しつつあり、国会での移植法案が日の目を見ようとする事で、今後に大きな期待が持たれているのも事実です。この事に関連して、年々増加し続ける透析導入患者の実態よりみて(表参照)、“如何に予防すべきか?”と云う問題について、多くの見地からも、研究が行われております。殊に近年、糖尿病の合併例の増加が著しく(表参照)、腎臓を中心として、眼(網膜症)、神経障害等を含めて、その予防について、様々なアプローチが試みられております。腎症の発症については、遺伝的、体質的な要因の関与もありますが、治療面での適確なコントロール状態を維持することが、大切な予防法の一つと考えられております。ちなみに、米国のある研究グループは、9年間にわたって、インスリン治療を必要とする患者について観察を試み、良好なコントロール状態を保ち得たグループで、腎合併症の発症が著しくおさえられた事を報告しており、多くの注目を浴びております。糖尿病の患者さんにとって、日常の家庭生活、あるいは、日々の社会生活に従事しつつ、良好なコントロールを保つ事は、大変難しい問題でもあります。急性の病気、あるいは、伝染病等では、季節的な要素もあり、短い期間での対応は、比較的容易であります。糖尿病の様な慢性の病気では、長期間、即ち一生にわたっての対応が必要となって参ります。最も大事な課題としては、充分な薬物治療は当然であります。殊に食事療法であります。本病態では、自覚症状が比較的少なく、多少とも糖尿病状態が悪化しても、軽い口渴を覚える程度で、殆ど日常生活に

影響するような症状が乏しく、そのため、“多少の脱線をしてはどうもないのではないか?”と云う変な自信が作られる場合が少なくありません。加えて現在、グルメの時代であり、又、過食、飽食の傾向の強い時代でもあります。そのため運動不足と相まって、どうしても、カロリー過剰状態に至らざるを得ない云う事になります。

このようなわけで、“適正な食事療法を守るには如何にすべきか?”とは、なかなか難しい問題で、我々医療従事者の指導のみでは、十分に徹底し得ないようです。本人の理解、さらに家族その周辺の理解が必要不可欠であります。

その他、糖尿病状態ではしばしば、高血圧の合併がみられますが、血圧の変動が、腎合併症の発症、進展にも、大きく関与している事が知られています。血圧は、一日の中で、変動を示し、朝、昼、夜等で、可成りの落差があり、種々の病態及び、各個人により様々であります。最近、正確な自動血圧計が市販されており、容易に各個人のパターンが把握されますが、主治医の指導を受け、充分なコントロールが必要です。勿論、前述の食事療法も不可欠であり、食事中の塩分の制限が大切である事は、いう迄もありません。

以上、腎症の発症、進展の予防について、述べましたが、日々の注意が、自然と身につくようになれば、大きなメリットとなります。



●わが国における総透析患者数ならびに慢性糸球体腎炎、糖尿病性腎症透析患者数の推移 日本透析医学会

(年 度)	1979	1981	1983	1985	1987	1989	1991	1993
総透析患者数	32,331	42,223	53,017	66,310	80,553	96,123	114,253	134,298
年度別新規導入患者数								
慢性糸球体腎炎	5,083	5,656	5,750	6,357	8,017	6,230	10,148	9,711
年度別導入患者総数に対する比率(%)	63.1	61.5	58.3	54.0	54.2	48.4	44.1	41.4
糖尿病性腎症	701	1,012	1,538	2,306	3,266	3,406	6,406	7,010
年度別導入患者総数に対する比率(%)	8.7	11.0	15.6	19.6	22.1	26.4	27.8	29.9

## 腎臓移植の普及を願って

兵庫県腎友会  
副会長 宮本高宏  
(37歳 透析歴13年8ヶ月)

私は、学生時代(19歳時)に急性腎炎を発病、卒業後間もなく23歳で透析を導入、以来13年が経過した。導入当時は、肉体的には勿論のこと精神的ショックと混乱は大きく、とても悩み苦しんだ。患者会(兵庫県腎友会)への入会をきっかけに、透析治療や様々な医療・福祉制度について学んだ。他の患者さん達の体験談も耳にした。透析医療や制度が、多くの医療関係者や同病の先人達の労苦や犠牲の結果成り立ったものであることを知った。その後、医療技術の急速な進歩もあり、透析治療も単なる「延命」から、「生活の質的向上」を目指す治療へ発展してきた。私自身の生活も、学習塾の講師として社会復帰・結婚・長女の誕生と「生きがい」を見出し、それを実感できるものとなった。多くの関係者や先人達の努力に心から感謝している。

同時に、日常生活の中での制約(食事・時間等)・不自由さ(行動範囲・活動量等)・肉体的精神的不安は否定できない。又、当初予想もされなかった様々な合併症が出現し、骨病変等は長期透析者にとっては避けられない現状にある。根治療法としての腎移植が治療として確立されている現状において、やはりそれに挑戦し、自分の可能性を追求し、生活の幅を広げたい。そのことで、

高齢で持病を持ちながら私に負担をかけまいと頑張っている両親のため、将来は移植が実現すると信じて私の治療生活・仕事・会活動を支えてくれている妻のため、「お父さんは、オシッコが出ないから、今日はイタタ?」と無邪気に励ましてくれる4歳になる娘のために、息子として、夫として、父としての務めをより大きく、より永く果たしたいと願っている。

最後に、腎臓移植の普及とあわせて、移植以外に治療法のない重症の心臓・肝臓の患者さんたちのために日本国内での脳死移植が開始されるよう、一日も早くそのための法的整備と社会的合意が形成されるよう訴えたい。また、一患者・一移植希望者として、その努力を続けていきたいと思う。



## ごあいさつ

(社)日本腎臓移植ネットワーク  
兵庫県コーディネーター  
曾我明美

日本腎臓移植ネットワークが発足して1年が過ぎ、各都道府県に1名の移植コーディネーターを設置するという意向のもとに、私は昨年11月に、兵庫県のコーディネーターとして推薦していただきました。その後、県庁医務課の古川さんをはじめとする県庁の方々や、兵庫医科大学病院看護部長及び、スタッフ、近畿ブロックセンターのチーフコーディネーター、そして兵庫腎疾患対策協会の皆様等、多くの方々の御尽力を頂き、6月1日より兵庫医科大学病院救命救急センターにおいて、本格的に業務を開始することになりました。この場をお借りして、皆様へ御礼を申し上げたいと思います。有難うございました。私は、腎臓移植のことについてはまだまだ知識不足のため文献での勉強はもちろんですが、人口透析を受ける

患者さんや、腎臓を提供してくださるドナーの家族の気持ちが少ないように、透析病院や救急センターへ研修に行きたいと考えています。

また、一人でも多くの方に移植のことを知って頂くための啓蒙活動や、5月に発表された「ドナー意志表示カード」の普及にも取り組んでいきたいと思っております。

これからは、腎移植に関する全ての質問、登録の窓口として業務を行うとともに、移植の仲介役として「移植を受けてよかった」「腎臓を提供してよかった」と言って頂けるような仕事をしていきたいと思っております。

まだまだ未熟で、皆様にご指導頂くことが沢山あると思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。